

恋人はスナイパー  
エピソード3への道  
アヴェマリア編 (前編)

新しい登場人物  
李飛(リ フェイ) 中国軍の男

(中)と書かれている所が中国語です。

1

きなこは暗い廊下を歩いていた。誰かの背中が見える。その人が振り返った。

(あ、ホイさん！・・・)

「僕がいなくなっても・・・幸せになるんだよ」

(何か言わなくちゃ・・・私・・・私・・・)

だが声がでない。彼は背中を向けて再び歩き出した。追おうとするが、足が動かない。

「ホイさん！」

やっと声がでた。目が覚める。

「また、同じ夢だ・・・」

カーテンに朝の光が当たって、明るい色になっている。立って行ってさっと開けた。暗い夢をみた後で、日の光は眩し過ぎた。

「チャン・ホイ」こと「王凱歌」の殺人が多くの人に渡って行われたため、国際犯罪とみなされた。日本だけでは対処できないと判断し、本国である中国へと引渡した。中国からも、

「我が国の脱走兵である。軍の面子もある」

と言ってきていた。

「ホイさん、ちゃんにご飯、食べてるかな」

きなこは白い朝の中に、遠い中国の彼を思った。

顔に当てられたライトの光が切り裂かれた・・・ように凱歌は感じた。殴られて壁に吹っ飛んだのだ。

ここはたぶん陸軍の施設だろう。だが、どこにあるかはわからない。護送車で運ばれてきて、窓のないこの独房へ入れられた。真っ暗なこの部屋に光が差し込むのは、小さなドアが開かれた時だけ・・・そしてそれはリンチの始まりだ。

前のヤツもそうだったのだろう。ここに入れられた時、すえた臭いがした。

「(中) 国家の恥じさらし！」

1人の軍人が腹を蹴ってきた。食事もろくに与えられていないから、もう吐くものもない。

(今日は3人・・・少ない方か・・・)

「(中) 大切な国の金で射撃の腕を磨きながら、殺し屋になるとは！」

「(中) 国の飯を食い、布団にくるまりながら、貴様は恩を仇で返したのだ！」

自分の言葉に興奮しながら、暴力はエスカレートしていった。

(国・・・だって・・・？自分たちのストレスを発散させているだけじゃないか・・・)

たまらなくなって、凱歌はその足を払わせてもらった。少しだけ・・・。だが、払われた軍人はバランスを失って、無様に尻餅をついてしまった。

・・・改めてリンチが始まった。

2

きなこは警視庁に向かっていた。

(今日は寄り道しないで行くか・・・)

たまっている仕事もあった。

時間を見つけては、コー・村木の行方を追ってみた。八雲の店へも行ったが、案の定、高価な品々と共に消えていた。

国際部に入ると、いつもはざわついている部屋の中が、しんと静まり返っていた。あちこちに人の固まりができています。どうやら、パソコンのまわりに集まっているようだ。

「え？何？」

緊張した空気さえも感じて、きなこは不安そうな声を上げた。気がついて、船木が彼女を呼んだ。

「円道寺君」

呼んでおいて、ハッと気がついたように彼女から目をそらした。黒谷や清水ら二課の男たちも彼女をちらりと見て、すぐに目を伏せてしまった。

「何ですか、課長」

ますます不安になる。

凱歌と別れた時、同時に、船木・・・婚約者である船木との別れともなった。凱歌を想いながら船木の妻になる・・・自分がそれほど器用ではないことに気がついた。同じ職場にいるのも辛かったが、国際課(ここ)だけが凱歌との接点だった。それに、船木も変わらない態度で接してくれた。もちろん上司としての。甘えさせてもらった。

「課長・・・？」

きなこがそばに来て声をかけると船木は悲しげな目で彼女を見、パソコンの画面に目を移した。つられて画面を見る。

「ホイさん！」

悲鳴に近かった。そこに映っていたのは王凱歌だった。

「公開処刑だそうだ」

船木が静かに言った。

「インターネットで配信してくるとは、見せしめですな」

黒谷が、画面を見つめながら首をふった。

「い、今、行われているんですよね」

きなこの声が上ずっている。

「ああ」

画面の隅では、デジタル時計が時を刻んでいる。

きなこは電話にとびついた。

「で、電話します。中国の、どこ？軍？で、電話帳！」

山積みになった書類をひっかきまわす。ドサドサと書類が散らばった。

「円道寺君！」

船木が厳しい声で制した。

受話器を持ったまま、きなこは固まってしまった。

「彼はあまりにも・・・殺しすぎた・・・」

初めて気がついた。あの夜、船の中で腕枕をしてくれた(勝手に)手は、血で汚れていたのだ。

「自分のしたことと向き合って・・・罪を償えば・・・」

何て残酷なことを彼に言ってしまったのか。「償う」ということは、自分の命で償うということだったのに・・・

部屋のあちこちで、小さな悲鳴が上がった。

処刑が終わった・・・。

係官が王凱歌の遺体を引き渡した相手は、『李飛』という厳格な感じの男だった。彼は係官に手伝わせて、遺体を厳かに棺の中に収めた。そして、棺と共に悠然と去って行った。

「(中) やれやれ、王凱歌ほどの者になると、上の人が引き取りに来るんだな」

と、係官は妙に感心した。

彼は知らなかった。廊下の角を曲がり彼の目が届かない所へ来ると、それまでの態度をかなぐり捨てて、李が駆け出したことを・・・。

外では、軍用車がエンジンをかけて待っていた。李がとびこむと同時に、全速力で走り出した。一般車を蹴散らしながら・・・。

数十分後、車は政府の施設らしい建物に入って行った。

その中のある部屋のドアが、内側から開けられた。さまざまな医療器具と、1人の医師が待っていた。

李が棺の乗ったストレッチャーを、押して入って来る。ドアに鍵がかけられる。

棺の蓋が開けられ、大きな音をたてて床に落ちた。

棺の中の凱歌を1, 2, 3で処置台へと乗せる。ハサミで服を切り裂く。手際良く凱歌の体に装置をつけていく。

「(中) あの薬は本当に効いたんだろうな」

「(中) たぶん。こっちだって、初めてのことなんだ。」

医師は凱歌の腕に注射をしながら、冷静に言った。

「(中) 私にとっては大きな賭けなんだ」

装置が緊急事態を知らせた。

「(中) くそっ！」

男たちは舌打ちをして、機敏に動き出す。

李が心臓マッサージを始める。

「(中) どいて！こっちだ」

医師が電気ショックをかける。凱歌の体が大きく反った。

その耳元で李が、日本語で叫んだ。

「帰って来いよ、王凱歌！」

昼過ぎ、きなこの携帯電話が鳴った。まわりの者に言われるまで、気がつかなかったが・・・。

「もしもし・・・」

「あ・・・きなこ・・・」

「父さん・・・なの？」

父の暗い声に驚いたきなこは、思わず聞き返してしまった。

「ああ。あのな・・・昼のニュースを・・・ホイさんが・・・さ」

口の中が一気に濁っていく。

「見たの？」

「本当なんだな」

「うん、ごめん。何もできなかった・・・」

声がかすれてしまう。

「俺が殺したようなもんだ。あの時、船木さんに・・・」

「そんなことはないよ。誰のせいでもない・・・」

そう自分にも言いたかった。

円道寺家の茶の間で、雁太郎が電話で娘と話している。その背中丸まっていて、彼を小さく年寄りに見せていた。縁側にいる美智も放心状態だ。

「母さんも参っているようだし、今日は早く帰って来てくれないか」

「うん、わかった」

と約束したものの、家族の悲しみを受け止める自信がなくて、きなこはいつもより遅く帰宅した。

3

(ピアノが・・・ああ、母さんが弾いているのだ・・・もう、起きなきゃ・・・母さんが起こしに来る・・・)

凱歌の目がうっすらと開いた。

「よし、いいぞ、そのまま目を覚ませ」

母の優しい声の代わりに、野太い男の声で起こされた。事態が呑みこめていない凱歌に、李は懐かしい日本語で語りかけてきた。

「ここは天国じゃないぞ。もっともお前は死んだら地獄行きだけど・・・」

そう言って1人で笑った。

「ピアノ・・・」

ベッドと、李が座っている椅子しかない殺風景な部屋の中に、心地よい音量で「アヴェマリア」が流れていた。

「ん？ああ、お母さんを思い出したか？日本の」

その途端、凱歌は彼の手首をつかんだ。

「母に危害を加えたら！」

「お前、混乱してるよ。何もしない」

そして李はボソリと、禁句を言った。

「この、マザコン」

凱歌の手が、李の口元をぎゅっとつかんだ。

「イテテ！悪かった。もう言いません」

李は両手を挙げて、降参のポーズをとった。凱歌は手を放してやった。と、今度は李が、凱歌の手を逆手に取る。

「さて、現実を言うぞ。王凱歌、お前は死んだ。ここにいるのは、722号という、国家のために働く兵士だ」

李は凱歌の耳元に、口を近づけた。

「私が上官の『李』だ。以後、お見知りおきを」

そういうことか、と凱歌は理解した。主人が、1211から中国にかわったのだ。

李は手を優しく放して言った。

「働きによっては、新しい名と戸籍を与えよう」

その甘い言葉にも、凱歌は反応しない。

「堂々と日の光の下で、お母さんと暮らせるぞ」

「罪は消えない。他人が忘れても僕は忘れない」

「時間が解決してくれる。そう、1211に奪われた時間を取り戻せ。『きなこ』という女と一緒に」

思った通り、「きなこ」という名に凱歌が反応した。

「彼女から、何度も嘆願書が届いている」

李は、凱歌を観察した。

(ふん、女のことを思い出している)

「いい娘じゃないか」

「あんた、おしゃべりだな」

「何？」

「言葉の裏に何を隠している？」

観察されていたのは、李の方だったらしい。

「コー・村木がそうだった。あんたは彼に似ている」

「1211のボスが・・・？」

さすがに苦笑いしてしまう。

「ヤツはなぜ、殺さなかったのかな。裏切り者のお前を」

今度は鎌をかけてみる。

「お前が1211をナンバー1にしたから・・・か」

凱歌が、記憶の中を模索しているのがわかる。李は案内人を買って出た。

「あの子は死んだよ」

凱歌が黙って見つめている。

「もう14、5年前になるか。あの時の香港最大の闇の組織は『虎児』(こじ)だったよな」

凱歌の表情に、暗い影が落ち始めた。

そして、心なしか、李の声も震えていた。

「あの地獄の中で、震えていたそうだな。正気を取り戻すことなく・・・死んだよ、冷たい牢獄で」

「彼」の記憶が、頭に叩きつけられた。痛い！

「あっちへ行け！人殺し！」

ナイフを振り回す少年の目に映った、正に「殺し屋」の自分の姿・・・。

「日本から送られてきた手配書を見た時、ぴんときたんだ。お前、いたんだろ、あそこに・・・」

ホテルのドアが開いた。部屋の中から現れた、屈強な男は、訪れた客をじろりと見下ろした。

そこに立っていたのは、くちゃくちゃとガムを噛んでいる、行儀の悪そうな18歳の少年(仲間内では針と呼ばれていた)と、暗い感じでうつむいている21歳の王凱歌だった。

男は黙って、2人の身体検査を始めた。針の腰からすぐにナイフを見つけ、取り上げた。

「(中)えー！飾りだよ」

部屋に入ると、十人ほどの男たちがくつろいでいた。凱歌はその空気で、計画がばれたことを感じた。

「(中)今頃、向こうにも客が行ってるぜ」

と、目の前の男が懐に手を入れた途端、凱歌は彼を蹴り、踏み台にして宙を舞った。サイレンサーの音が追ってくる。壁を蹴って逃げる。銃弾で壁に次々と穴が空いた。

針が混乱に乗じて逃げようとするが、先ほどの男にナイフを投げつけられて阻止されてしまった。針の腕にナイフが刺さり、女のような悲鳴を上げた。

その声に、凱歌は針のそばに降り立つと、彼を守るように拳を構えた。彼らを取り囲む拳銃の群れ。

「(中)はい、ご苦労さん」

奥の部屋からボスが出てきていた。2人の男を値踏みしている。

「(中)ほう、1211はよく、わしの好みを調べたな。まったく、笑っちゃう程、必死だね」

「(中)も、もう、何もできないから、帰して」

弱々しい声で、針が哀願した。

凱歌はボスの出方を待った。それによって、チャンスはどちらに転がるか。

「(中)お入り。こわーい殺し屋さん」

ボスはおどけた仕草で、奥の部屋を指した。計画は続行だ。

「(中)大丈夫ですか？」

と手下が聞くのに、ふふんと鼻で笑い、ちょうど通りかかった針の腕からナイフを抜き取った。

再び悲鳴を上げる針を、凱歌は奥の部屋の床に寝かせた。扉を閉じる音がした。凱歌は気づかないふりをしながら、シーツを裂き、傷の手当てをし始めた。その間にも彼の意識

は、後ろから迫る男に集中していた。

「(中) お前は足だ！」

ボスは凱歌の足をめがけて、ナイフをふりおろした。確かな手応え。それに対する気の緩み。

彼が、この世で最後に見た物は、凱歌のぞっとするような狼の目だった。凱歌はボスの首を抱え込むと、自分の足からナイフを引き抜き、一気に、温かい命を掻き切った。

そのナイフを針へ放った。「自分の身を守れ」ということだ。

殺した男は小心者ではないが、用心深い。ベッドの上の枕をどかすと、拳銃が2丁でてきた。それをつかみ、音もなく戸口へびたりと体をつけた。

ちょうどよく、針がめそめそと泣きだした。

隣の部屋の手下たちはそれを聞いて、笑いだした。

凱歌は扉を蹴破ると、銃を撃ちまくった。男たちは銃を構える余裕もなく、彼の放つ銃弾に倒れていく。1発で……。

凱歌にはその光景が、スローモーションのように映っていた。いつのまにか彼らのために、「アヴェマリア」を口ずさんでいた。

正に、殺らなければ殺られる。この世界で生きていく、という現実だった。

凶暴なまでの自己防衛本能に、愕然とする。

「母に会うために、生き残らなくてはならないのだ」

自分に言い聞かせた。

奥の部屋から針が出て来た。

「何だよ、これ……」

凱歌は、彼の方へ手を伸ばした。おびえたように、少年は凱歌の手をとった。2人で遺体の間を歩いて行く。彼の精神が壊れつつあることを、握った手に感じていた。

「うわー！ あっちへ行け！ 人殺し！」

そう喚くと、針はめちゃめちゃにナイフを振り回し始めた。そして、まだ彼の手の中にあった、凱歌の手を傷つけた。更に血を見て、ますます暴れた。仕方なく、凱歌は1人で部屋を飛び出した。想いを残したまま……。

香港の裏通りをどのくらい、さまよったことだろう。虎児の追っ手をかわし、お守りのように銃を握りしめ、凱歌はどうにか生きのびていた。

「1211は僕を切り捨てるだろう」

だが、彼は迎えに来た。どぶと汚物の臭いが混じった街へ。そう、1211のボスが迎えに来たのだ。初めて会った時のように、車の中から彼は凱歌を見つめていた。

「(中) 二度とこんな仕事はさせない」

約束通り、凱歌にはスナイパーの仕事だけが、回ってくるようになった。手を汚すことには、変わりりはなかったが……。

「あの絶対君主のボスが死んで……」

李の言葉にはっと我に返る、凱歌。

「虎児は1211に吸収されたり内部抗争で、事実上、壊滅したよな。コーのボスとしての地位も、安泰となったわけだ。その功績者のお前が、今度は1211を潰すんだ」

「アヴェマリア」が、悲しげに部屋を満たしていた。

4

コー・村木はいらいらしていた。

彼が苦労してアジア全域に広げていた、俗に言うアジトが、片っ端から潰されていた。いや、正確には乗っ取られていた。

闇取り引きで得た巨額の金、外国の裏社会のパイヤーへのライン、と、その他挙げればきりが無い。とにかく、「大切な資金源が、中国政府に抑えられてしまった」ということなのだ。

そうになると、ボスとしての一番大切な、「下の者に、腹いっぱいメシを食わせてやること」が難しくなる。組織の弱体化、やがて崩壊へと繋がる。

頭のいい連中だ。タダではこちらを潰さない。利用することを、まず考える。

「汚いことは俺たちにやらせておいて、おいしいところだけ、持っていくんだな」

苦々しくつぶやいた。

「誰だ？」

急に思いついて、部屋の中を歩き回った。

「誰がいるんだ。どうしてこんなに急に・・・しかも正確に・・・裏切り者がいるということか！ 捜せ！ そいつを！」

机の上のパソコンが目に入った。凱歌の処刑を思い出す。

コーはその映像を引っ張り出して、何度も見始めた。画像の隅から隅まで分析したのだ。ある部分を狙っては、拡大、情報を集める。そうして、ようやくたどりついたのは、「李飛」という軍人だった。

「凱歌、あいつの手におちたか・・・」

深いため息をついた。

沖浦島で、凱歌をヘリに乗せなかったことが、今更ながら悔やまれる。母親の病気のこととは知っていた。最後の別れをさせてやろうと思った。今まで慎重に行動してきたのに、たった1人の弟への想いが、ほころびを作ってしまった。

香港での1211と中国軍との闘いは、熾烈を極めた。

血気盛んな若い者たちが、半ばやけになって暴れると、彼らはテロリストとみなされ、有無もなく射殺されていった。幹部たちも、次々と逮捕された。

その混乱の中、王凱歌は李と共に、必死にコー・村木を追っていた。

しかし、どうやって「決着」をつけるのかは、考えあぐねていた。

5

「日本へ行く」

李に言われて、凱歌は顔を上げた。

「日本はヤツにとって、最後の砦だ。追い詰めるぞ」

性急な気がしたが、凱歌は無言でうなずいた。

李は日本へ、自分のチームを「香港警察」と称して、乗りこんだ。軍の中から特に選び、訓練した者たちだ。

日本に着く早々、警視庁国際部国際課へ挨拶に行った。一課の課長に・・・そして二課の船木課長・・・。

「劉文忠は私の部下でした」

船木がはっとする。

「そ、そうでしたか。お気の毒なことを、しました」

「劉を騙っていた范火清も、コー・村木と共に消えたそうですね」

「はい。詳しいことは」

「円道寺きなこさんに、聞けばよろしいですか？」

「え？ あ、はい・・・」

きなこは船木に呼ばれて、李を紹介された。

「あなたは優秀な刑事だ。こちらから送った僅かな情報で、『チャン・ホイ』というへなちよこを『王凱歌』と、見破ったのですから」

凱歌の名を聞いて、きなこの顔が曇った。

「今回もあなたのご活躍を、期待していますよ」

そう言って笑った。きなこはその笑顔が、偽もののような気がした。

八雲がそわそわしながら、新しい自分の店で人を待っていた。相変わらず、高そうな壺やら皿やらが、所狭しと置かれている。

そして、コーが少数の手下と共に現れた。

「ボス、とんだことになって・・・」

「情報を集める。どんな小さなことでも・・・」

「は、はい・・・」

国際課と李のチームは、1211のアジトを急襲しようとしていた。

かなり大きな所で、幹部もあり、香港から密輸された武器もあるらしい。国際課の刑事たちの努力でつかんだ、貴重な情報だった。

しかし、そのアジトである廃ビルに、踏み込んでみて驚いた。どう見てもチンピラにしか見えない者たちが、賭博をしているだけ。しかも、抵抗する彼らの手に握られているのは、銃どころか、角材や鉄パイプだ。

その光景に、李は苦笑した。

「どうやら、我々の出番はないようだな」

むっとしたきなこは、1人でチンピラたちに向かって行った。

「叩けば、埃がでるかもよ！」

自分たちの努力を、笑われたような気がした。いつもより拳に力が入る。

「(中)やはり、出番はないらしい。帰ろう」

李はメンバーたちを促すと、無線で誰かに連絡をとった。

「(中)722号、引き上げだ」

返事がない。

「おい、722号？」

「彼女が1人で・・・」

その廃ビルが見渡せる少し離れたビルの屋上に、ヘッドマイクをつけ、ライフルを構えている王凱歌がいた。

「援護します」

「馬鹿！」

と李は怒鳴ってから、

「(中)お前に渡した弾は、コーにぶちこむためのものだ。こんな所で使うな！」

言い終わらないうちに、無線から、銃弾が発射される音がした。背後からきなこめがけて、鉄パイプを打ち下ろそうとした男が、悲鳴を上げてドサリと倒れた。

「え？」となって見るきなこ。

「スナイパー・・・？」

きなこは、隙をついて猛ダッシュしてきた男に蹴りを入れた。

「邪魔だ！」

男は紙くずのように吹っ飛んでしまった。

きなこは、弾丸が飛んできた方向を見極めると、そのビルの方へ走り出した。



「え？きなこちゃん！」

「円道寺君！」

残された二課の男たちが、悲痛な叫びを上げるが、彼女は振り返らない。気がつくと、彼らはチンピラたちに囲まれていた。意を決した刑事たちは、きなこの見様見真似で、一斉に拳法の型を構えた。

「はっ！！」

きなこは、ビルの階段を駆け上って行く。

(もしかして・・・もしかして・・・ホイさん！・・・そんなはずはない。期待しちゃいけない。違っていたら・・・私・・・立ち直れない)

きなこの足が止まった。階段をおりて来る靴音がする。1歩、また1歩・・・きなこの心臓は破裂しそうだ。

足音が止まった。すぐそこの踊り場の所で止まっている。黒い影が僅かに見える。

「ホイさん！」

と、階段を駆け上がろうとした時、後ろから来た影が横を通り過ぎ、目の前に立ちはだかった。

「どうしたんですか、円道寺さん」

李である。必死に彼女を追いかけて来たのだろう、息が荒い。そこまでして、隠したい人って・・・きなこの胸にますます疑惑が広がる。

「誰なんですか、私を助けてくれた人・・・」

「我々のチームの1人です。紹介はしていませんでしたが、狙撃担当ですよ」

「お礼を言いたくて・・・」

李の横をすり抜けようとしたが、阻まれてしまう。

「私から伝えておきましょう」

「そうですか・・・」

引き下がるふりをして、再度突入を試みるが、意外と素早い動きで止められてしまった。李の冷たい目が、「早く消えろ」と言っていた。

仕方なく、きなこは階段をおりて行った。彼女の姿が見えなくなると、李は階段を勢いよく上り、隠れていた凱歌を思い切り殴り倒した。

「命令違反は、すべてを台無しにする。お前1人で動いているんじゃないんだ」

しかし、倒れている凱歌に手を差し伸べると、優しく言った。

「会える時が来る。だが、今は困る」

それを信じたわけではないが、凱歌は彼の手をとった。